蒼い空

ポエム

ミ　ユ

はじめに

10代から20代にかけて散文詩ばかりを書いてました。
歌詞のようなタイトルなどはないので、
すべて「ポエム」としたうえで番号を付けてあります。

読み直してみると修正したい箇所ばかりですが、
あえて、そのまま記載しました。

不定期に更新して行きます。

ポエム

遠い春の風を捜しても 決して求められないように
一度踏みつぶした　ふたりの時間を呼び起こそうなんて
白紙に戻せもしない毎日を　どう見送ればいいの

通り抜けていく風　それがあなた
もう一度　わたしを包んで欲しい
私の風が見あたらないの
暖かな日差しさえ
探し求めるだけ無駄なようね

今では自分の姿さえ
通り抜けていく風のよう・・・

ポエム-2

風がほら
ささやいている

もう忘れなさいって・・・
もう過ぎた事だって・・・

でもだめなの
あの人との想い出消しちゃったら
何もかも
崩れてしまいそうなの
やるせない毎日でもいいの
形だけの　わたしでいいの
今は保っておきたいのよ
このままでいたいのよ

ポエム-3

暗闇に放り込まれた熱い想い
　ほんの少しだけ灯りがともっているの
このまま信じられる時間が来るのを待っていようかしら
それとも受けた優しささえ切り捨てて
　やはりひとりで早紀を見つめようかしら
わたしの内側が変わってくる
できるならば　あの人と同じ季節を過ごしたいと・・・

燃えかけては消えていく
　そんな時間の想いが　わたしをまどわすの
信じたい　信じられない
言葉に出して訴えたい
　うごめく気持ちをしめつけてと・・・

すこしで良いから勇気を与えて
　もうちょっと　あの人に近づきたい
わたしの中で揺れているのは
　消えていく愛があるのを知ってるから・・・

ポエム-4

静かに流れるジャズピアノ
灯りもつけずに月の光だけが
　ブラインドのすき間からラインに映る
甘いブランディーを少しずつ　ひとりきりの部屋で空けていくグラス
なくした熱い夢を追い求めるように
　いくつもの点で占められた過去を見つめているの

・・・確かに燃えた時間があった
　　確かに消えた想いもあった
　　なくしたのは時間の重さだけでなく
　　優しさもすべて涙で冷えた
　　取り戻したいのは
　　信じられる時間の重さだけ

夢に憧れて　言葉にうなづいて
そんな無邪気な思いやりが
　遠い日々に釘付けされた
今のわたしをかこむのは
　淋しさを醸し出す笑顔ばかり
甘い香が部屋中ひろがったら
　心の中まで優しくなれるのかしら・・・

ポエム-5

別れの訳も聞かず
　　あなた　目を細めて見ていた雨
なじみの喫茶店でコーヒー飲み干した　あなた
マスターの言葉は聞こえないのね

ただ　あなたの優しさが
　　私の心を動かしただけ
いけないのは私の方なのに
　　あなた　寂しい瞳を向けるだけ

私の出した銀の指輪に
　　すべての想い出を刻みましょうか
一杯のコーヒーよりも　あなたの失った物を
　　私がつなぎ止めたいのに・・・
私の心は
　ただ
　ただ　あなたにサヨナラを言うだけ

このお店にくるののも
　　あなたとなら最後ね
望みをかけてきた明日という日への
　ひとつの裏切りをしてしまった私・・・

ポエム-6

窓から差し込む木洩れ日に照らされて
　　煙草の煙が踊っているわ
いつもなら　こんな時
　あの人に寄り添っている　わたしなのに・・・

淋しいなんて決まり文句
あの人の手のひらは
　　もう　わたしの肩を抱いてくれないのね
あの人の煙草の吸い殻に　涙がこぼれ落ちた
煙と一緒に
　　想いでも消してくれないかしら・・・

ポエム-7

わたしの愛した　あの人は
　淡いグリーンの風とともに
　この心をすり抜けてしまったの

わたしの愛した　あの人はもう
　前のように　この手をひいてくれない
　歩いているのは　わたしひとり

あの日　目覚めたら
　わたしの愛した人は
　すべてをこの部屋に閉じこめて
　この嘆きさえも気づかずに
ただ遠い記憶にかられながに
　この場所から逃げて行った・・・

ポエム-8

言葉の裏で遊ぶ悲しみを
　　心の中に押し込んで
　　自分の愛などかき消してしまう
　　それが今の路
わたしの探し当てた　　あの人との想い出
　　その果てには　今の路

いくら捜しても
　　戻らないのは誰が悪いの
きっと
目隠しされ続けた
　　わたしの愛が悪いだけ

遊ぶのは悲しみだけ
　　心を呼び止めるのは
　　あの人との愛だけ
　　ただ　　虚しいだけ

ポエム-9

左手をコートのポケットに入れて
　片手でタバコに火をつけた　あなた
これでサヨナラだよって
　　何くわぬ顔して　目を細めた人
あなたの人差し指が
　わたしの知らない誰かを指したのね
心の中の空白時が　　今
吸いかけのタバコを踏み消して
　まるで夢から覚めたように
　わたしの前から行った人・・・